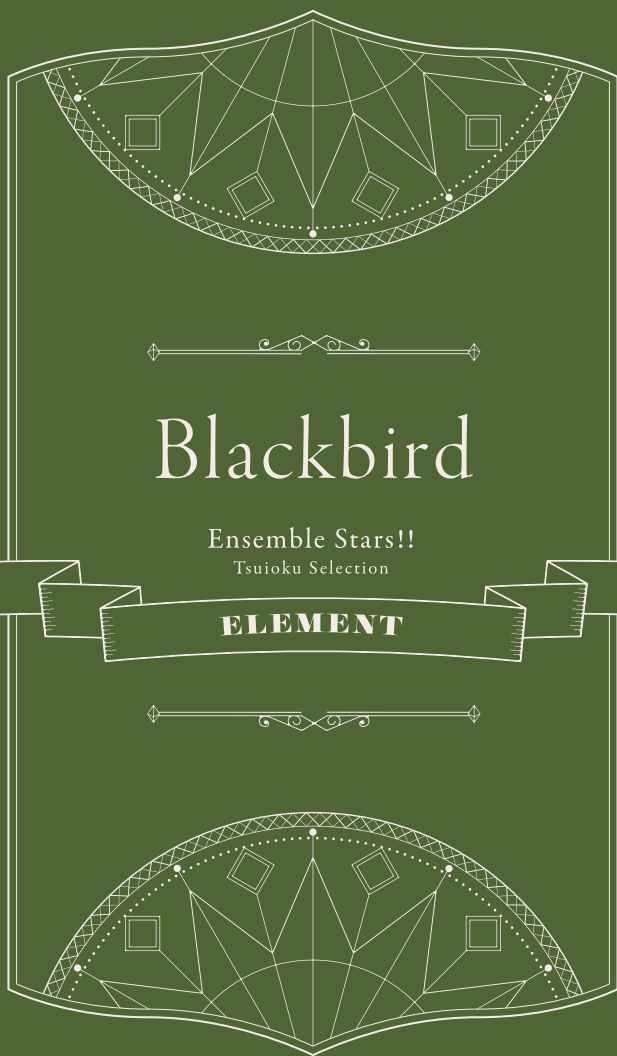


A newly written Original Scenario



Blackbird

Ensemble Stars!!

Tsuioku Selection

ELEMENT

✧ Written by 日向 ✧

Blackbird

夢物語が燃えている。

——必ず最後に愛は勝つ。

——努力も善意も報われる。

——強く願えば、叶わない夢などない。

そんな、大人になれば誰もが嘘っぱちだと理解してしまう世迷い言を、寝言を、ひたむきに信じた少年の純情そのものの紙束が、焚き火に放りこまれて焼かれている。

夢と希望の燃えかすが、熱気によって生じた上昇気流に煽られて——

灰と煤が舞い上がり、綺麗な空をみじめに穢している。

「ああ、これは酷い！」

日々樹渉が天を仰ぎ、言葉とは裏腹にむしろ悦ぶように身悶えした。

美しい男である。

月光を固めたような白銀色の長髪。完璧な黄金比の恵まれた肉体。

洗練されたデザインの制服を、わけのわからない感じに着崩している。

表情や仕草も洗練されていて過剰に魅力的で、動くたびに鱗粉や蛍光が舞っていないのが不思議なほどだ。

だが彼は美しすぎるからこそ、どんな町でも浮いてしまう。

通りすがりの人々はまるで怪物に行き逢ったかのように、奇異の眼差しを向けながらも遠巻きにするか、その場から逃げ出している。それは怪異と遭遇した際には、最も適切な反応だが――

せめて悲鳴をあげてほしい。

罵つて唾を吐き、石を投げてほしい。

無視されるのがいちばん辛い。

涉はそう主張するみたいに誘うような動きをしていたが、そんな彼に近づいてきたのは一羽の薄汚れた鳩だけだった。

「ああジル！ 可哀想なジル・ド・レイ！ 羽根がすっかり汚れてしまっていますね！」

肩にとまったその鳩に頬擦りをしながら、涉は慨嘆する。

「煤まみれで、鳩というより鴉のようですよ！ 鴉つて賢いので仕込めば良い芸人”になりそうですけど、なぜか嫌われがちなので難しいですかねえ？」

当たり前のように鳩に話しかける涉を見て、周りの人々はさらに遠ざかる。

「……今の私には、逆にそういう存在のほうが相棒として相応しい気がしますけど」

寂しげにぼやいた渉の髪を、煤まみれの鳩が嘴で引つ張る。

「痛たたた!? 冗談ですよジル! やきもちですかつ、卵から育ててともに暮らしてきたあなたを捨てて他の相棒を探すわけがないじゃないですか! どうか、お願いですから機嫌を直してくださいね——おや?」

鳩が暴れた拍子に、その嘴の隙間から何かが零れ落ちる。

それは、燃えかすだ。

遠くから風で運ばれてきた、夢の残骸だ。

「素晴らしい! ちょうどインクが切れて困っていたんですよ!」

渉は歓喜して、その燃えかすを指先で磨り潰す。

そうして黒く染まった指で、ずっと抱えていた書類の束に己の名前を記した。

「——これで、完成です」

そんな書類の束を宝物のように抱き寄せて、渉はまた身悶えをする。

「彼は、喜んでくれるでしょうか」

* * *

戦争があつた。

少年たちが己の夢や理想、愛のために傷つけあい殺しあつた悲惨な抗争が。

もちろん、それはそのような陰惨な記憶として回顧されはするが、本当に人々が銃器や刃物を手にして血で血を洗う戦いをしたわけではない。

彼らは誰もがアイドルだった。

舞台上に立ち、歌い踊り、人々を幸せにするのが至上命題だ。

だが当時の彼らの居場所、私立夢ノ咲学院はアイドルが正しくアイドルとして生きられる環境ではなかつた。すべては濼んで腐敗し、停滞していた。

そんな現状を変えるために、立ち上がったものたちがいた。

そんな彼らが掲げた「革命」の二文字に、大事なものを切り刻まれ、怒り哀しみ反撃を試みたものたちもいた。

彼らは誰かを幸せにするために用意されたすべてのものを武器にして、悪用して、己が抱えた鬱屈や不幸を押し付けあつてしまった。

結果、この広大無辺な世界は、ほんのわずかに変わった。

だが、そのために支払われた代償はおおきかつた。

——夢ノ咲の抗争時代。

——最初の革命。

——終わりの始まり。

誰もが後悔を滲ませながら、当時の悲劇を追憶する。

* * *

病室である。

夢ノ咲学院の近所にあるその真新しい病院は、たったひとりの人物の体調に異変が生じた際、即座に対応するために建造された。

集められた最新の医療機器や一流の医師たちも、時には他の患者を後回しにしても、無理やりにでも“彼”を生き長らえさせるために存在している。

“彼”とは世界でも有数の大富豪、天祥院財閥の御曹司——天祥院英智である。

彼は夢ノ咲で練り広げられた抗争の、主役のひとりだ。

彼は、誰よりもアイドルを愛していた。

だが幼いころから財閥の家庭教師によって刻みこまれた帝王学が、生まれ持ち育んだ明晰な頭脳が、乾いた心が、彼自身の手によってその愛するものを虐殺させた。

そんな皮肉な運命によって己が為した悪行の数々が、彼を蝕み、病ませた。

「……………」

天祥院英智は、広々とした病室の床の上に転がっている。

彼も美しい男だが、その美しさにはひび割れが生じている。

満足に食事もとつていないのか痩せ衰えていて、陽光を固めたような金髪も乱れてくすんでいる。身にまとう高級な素材でできた入院着も、皺くちやで薄汚れていた。

巢から落ちてしまった雛鳥のようだ。

そんな彼を癒し生かすための点滴などの医療器具はすべて、彼自身が筆取りめちやくちやに叩き壊してしまった。

そんな英智を気遣い、あるいは職務のために治療しようとした医者たちも、さんざん彼に脅され罵られて遠ざけられた。

——もう生きていたくない。

——お願いだから僕を治さないでくれ。

——僕は、生きていてはいけない人間なんだ。

「いいえ」

干からびて死ぬ寸前だった英智の、誰にも聞き取れないはずの独り言に、応える声があ

つた。

病室の壁にある唯一のちいさな窓から、どうがんばって身体を折り畳んでもそこからは入れないだろうに、図体のおおきな日々樹渉が音もなく侵入してきていた。

夢のように。

奇術でも用いたかのように、出現していた。

「——君か。『五奇人』、日々樹渉」

「もうその物語は幕を閉じたんですし、その呼び方はやめませんか？」

夢うつつに語る英智に気安く返事をしながら、渉は病室を闊歩する。

床に散らばった無数の何かの残骸を踏まず、決して壊さずに。

「気持ちを切り替えましょう！　今はお互い舞台の成功を喜びながら、休息し英気を養いましょう！　それが我らの義務ですよ、天祥院英智くん！」

「いったい何をしにきたんだい、君は？」

暗い目で渉を見上げながら、英智は怨み言を吐くみたいに囁く。

「勝利したつもりで、実際は何もかもを喪ってしまった僕を嘲笑いにきたのかい？」

不様な姿を晒しつつづけることは誇りが許さなかったのか、英智はふらつきながらも寝台に腰掛ける。

清掃業者すら遠ざけたため、汚れきったそのベッドが、今の彼の玉座だった。

「それとも。お友達の、『五奇人』のみんなの仇討ちでもするつもりかい？」

「いえいえ、いええ？ あなたは多少は不出来ではあったものの、見事に舞台を最後までやり遂げました！ 賞賛こそすれ、嘲笑するなんて有り得ませんよ！」

渉はあくまでも、楽しげに語る。彼が床に散らばった花瓶の周りから色とりどりの花びらを拾い上げ、それを握りこんで開くと一輪の完璧な花となった。

「それに。私の親愛なる友人たち、『五奇人』のみんなはべつに殺されてはいません。そんなに柔じゃないですよ、あまり馬鹿にしないでもらいたいものですね」

一瞬だけ双眸に敵意を漲らせながらも、渉は仮面をつけるようにそれを隠した。

「宗は彼が愛し愛されているお人形さんたちに慰められ、ゆつくりと氣力を回復させています。秦汰も、彼の心を救った未熟な英雄さんとともに、新たな人生を歩み始めています。もちろん我らが魔王陛下、零も——あれはねえ、たとえ殺されても死にませんよ」

ひとりひとり『五奇人』と呼ばれた傑物たちの名を上げて、渉は微笑む。

「そして。我らが命懸けで守り抜いた末っ子、夏目くんには傷ひとつありません。あなたが手放してしまった青い鳥を早くも見つけ、『五奇人』ではないひとりの人間としての、アイドルとしての人生を歩み始めています」

「……彼らは強いね。みんなみんな、僕よりも強くて立派な、尊敬すべき人間だ。日和くんも風砂くんも、早々に次のステージに進んでいるようだし」

英智は何だか呆れたような顔をして、途方に暮れた迷子じみて頊垂れた。

「動けないのは僕だけか。『五奇人』征伐、あるいは夢ノ咲抗争と呼ばれるべき一連の物語において、敗者は僕だけだったのかもしれないね」

「いえいえ。私もねえ、実は恥ずかしながら今後——どうすればいいかわからなくて」

英智とよく似た呆然とした顔で、渉はわずかに黒い汚れが残った指先で花を弄ぶ。

「最高の舞台を、最善ではなくても次善の結果で終えて、かなり満足してはいるんですけど。今後の予定がなくなってしまうって、ちよつと困っているんです」

「そうかい。それは申し訳ないね、と言っておこうか。君は悪意を一身に集めている、嘲笑と侮蔑の対象となるべき悪役を演じたからね」

「ええ。お陰で私に依頼してくれるひともいなくなり、今後の予定が未定になってしまうんですよ。自分で舞台を準備して、勝手に適当な物語を上演してもいいんですけど……一人芝居は寂しいでしょう？」

「君はいつも、独りでも楽しそうに舞台上に立っていた気がするけれど」

「仕方なくですよ。誰かを喜ばせてこそその、エンターテイナーです。私は私のためだけに舞台には立ちたくありません、それだとやる気が出ないんですよね」

肩をすくめて、渉は英智にそつと花を差し出す。

「なので。私を最も満足させてくれた舞台の主催者に、新たな依頼をしてもらおうと思っ

たわけです。そのためにこうして来たんですよ、お見舞いも兼ねてね」

「それは皮肉かい。僕は君と君の愛する友人たちを貶め辱め、自分の欲望のために踏みに
じって殺したのに」

「誰も死んではいませんよ、英智くん。すべては単なる物語です」

「自分たちはちつとも傷ついていない、と言いついて張って負け惜しみがしたいのかい」

「いいえ。私があなただを怨み、怒ってしまったら、それこそ気高く悪役を演じきった友人
たちへの侮辱になってしまいます。なので私は、仇討ちなんてしてあげません」

「君の感覚はよくわからないね」

「私にもわかりませんよ。こんなふうに、生きていくという実感を伴って生きるのは生ま
れて初めてなもので……。己のなかに渦巻くものが、何なのかわかりません」

そう言つて、生まれて初めて転んだ幼児のように、渉は無垢に首を傾げた。

* * *

「おっと。漫然と話してしまいましたが、その前にお見舞い品を渡さなくては」

唐突に我に返り、渉は英智にそつと手にしていた花を渡す。

その花は英智の指に触れた瞬間、書類の束に変わった。

魔法のように。

「……驚いた。相変わらず手品が上手だね、日々樹くん」

「そんなふう知ったような口を叩かれるほど、あなたと親しくはないんですが」
「ずっと見ていたんだ、君を」

英智は虚勢を張る元気もないのか、素直にそう言つて書類の束をめくる。

その顔に、ありありと驚愕が浮かんだ。

「これは——」

「フッフ。我ら『五奇人』の愛すべき末の弟にして唯一の息子、夏目くんが一生懸命——
書いていた夢物語です」

英智の驚く顔を見て、渉は満足そうにしながら語る。

「そこには先日、行われた私とあなたたちとの最終決戦において、私たち『五奇人』側が
勝利するためのシナリオが書かれています」

「そういえば君、決戦の前に『五奇人』たちと何か遣り取りをしていたね。僕もそれどころ
じゃなかったから、そちらについては関知しようとしなかったのだけだ」

書類の束を丁寧にくくり、読み耽る英智の頬がゆるむ。

「ふふ。かわいいね、まさに夢物語だ。大好きな『五奇人』に負けてほしくない、誰ひとり喪うことなくハッピーエンドに辿り着きたい——」

「ええ。そんな有り得ない空想が、非現実的な妄想が書き綴られています」

「……あの舞台で、僕たちが君を倒したからこそ、曲がりなりにも決着は付いた。あそこで君たちが勝っていたら、今でもなお僕たちは泥沼の抗争を続けていただろうね」

「ええ。それは予測できたので、私はかわいいあの子の——夏目くんの夢と期待と愛が詰まったこれを、受け取りませんでした」

「そして予定調和で、すべては片付いた」

「ええ。けれど、さすがは我らが愛したあの子が必死に綴った物語です、なかなか面白いでしょう？ 見ないふりして捨て去ってしまったのは、あまりにも惜しい」

渉はそれこそ赤ん坊でも労るみたいに、書類の束の表面を撫でる。

「なので一瞬で内容を精査し、記憶して、こっそり複製してみました。本物は夏目くん自身が先刻、燃やしてしまいましたから——あの子が描いた夢物語は、もう地上のどこにも存在しないはずですが」

悪戯を成功させた悪戯鬼の顔で、渉は笑う。

「誰もがそう信じているはずですが。ここに、模造品ですが、限りなく本物に近いものが残っています。いいえ、私が己の欲望のために、蘇らせて残しました」

「ふうん。でも、これは使えないだろう？　あまりにも現実とはかけ離れた妄想の集積物で、つまり何の価値もないがらくただ。残酷な現実から目を逸らした愚かな読者が、自分に都合の良い展開を捏造した二次創作のようなものに過ぎない」

書類の束を汚れた寝台に放り出し、英智はそれを嘲笑う。

「それは、この世界とは関係ない。そんな物語は、夢見がちな書き手の頭のなかにしか存在しない。本物じゃない、現実じゃないんだよ」

「ええ。ですから、ちゃんと現実が見えているあなたが、これを再構築してください」

「……………？」

「どうせ、入院中は暇でしょう？」

英智が放り出した書類を一枚一枚、丁寧にかき集めて渉は微笑んだ。

「あなたはその暇な時間を使って、この書類を基にして考えてください。新しい物語を。」

『五奇人』が、あなたの敵が勝利する物語を」

「それに何の意味が？」

「そんな可能性は限りなく低いかもしれませんが、意に沿わぬ未来が訪れたときのために備えておくべきでしょう。あなた自身がいちばんよく理解しているでしょうけど、あなたは生まれつき病弱で——いつ死ぬかわからない」

「……………そうだね。今は生きる気力を失い、治療すら拒んでいるし」

「そして。物語の主役だったあなたが死に、唐突に理不尽に欠けてしまったら、物語そのものが破綻してしまいます」

「……………」

「私の言いたいことがわかりますね、英智くん」

「わかるとも、日々樹くん」

屍体のように濁っていた英智の双眸に、輝きが生じ始める。

「僕には責任がある。主人公としての、作者としての責任が。僕は、僕という登場人物が死に、世界から、物語から消えてしまうときのために備えなくてはならない」

「はい。ただ、あなたは物語づくりの本職（プロ）ではないようですし、何か物語の下敷き——原案になるものがあれば良いかなと思っただんですよ。この夏目くんの夢物語なんか、内容的にもクオリティ的にも打ってつけでしょう」

「そうだね。天才児、最年少の『五奇人』が命を削って紡いだ物語だものね」

英智は今度こそ嘲笑を浮かべずに、素直に仇敵を賞賛して微笑んだ。

「助かるよ、日々樹くん。さすがに僕が死ぬことを前提とした物語を、誰よりも僕が死ぬことを嫌がる敬人に書かせるわけにもいかないし」

英智は親愛をこめてそう言うてから、自分の言葉に驚いたみたいに目を丸くした。

すべてを喪ったはずの自分自身に、まだ愛すべきものがあることを思い出したのか。

「僕が、書こう。僕が死んだ後も、物語は続いていくのだから」

活き活きとしながら、英智は寢台に飛び散った汚れで指を染め、書類の束の裏側に文字を記し始める。その字はくたびれていて乱れていて、今は彼自身にしか読解できない。

「まずは、生きているうちに僕が倒されよう。『五奇人』を倒しすべてを手に入れ、乱心し暴君と化した僕を新世代の英雄が討ち果たすんだ。それは『五奇人』の生き残りである夏目くんでも、他の誰かでもいい」

「はい♪ それで？ そこから物語はどうなるんです？」

「単に支配者が交代するだけでは意味がない。もつと社会の構成員自身が自発的に、世の中を良くするために動き始めるべきだ。そう、次に目指すのは市民革命なんだ。だから、ええつと、あああ——」

英智は勢い余って書類をぐちゃぐちゃにしてしまい、頭を抱える。

「考えがまとまらない！ 僕は天才じゃないからね！ ああつ、情けないし君に頼める筋合いでもないのだけど——構想を手伝ってくれないかな、日々樹くん？」

「はい、喜んで♪ どうせ私も暇ですしね！」

寢台に腰掛けて、渉は熱中して物語を紡ぎ始める英智を幸せそうに眺める。

「次に私が立つべき舞台が、どのようなものになるか、私も楽しみにしています。ああ、今も昔も、それだけが私にとっては人生の喜びのすべてなんです」

「紙が足りない！　あと筆記用具が欲しいな！　日々樹くん、適当にそのへんで買ってきてもらえる？」

「はいはい。あなた、私のファンなんじゃありませんでした？　顎で使いますね？」

まあ構いませんけど、と微笑んで、渉は鳥が飛び立つように動き始める。

「さあ謳いなさい、紡ぎなさい、創造しなさい——物語を！　悲劇は二度目は喜劇になりますつ、きつと次回作はとつても楽しい物語になることでしよう！」

「いいから！　余計なことを言つて早く！　僕の寿命が尽きる前に！」

「はいはい。人使いが荒いですね、作者さまは……♪」

……………。

そうして、日々樹渉は天祥院英智の物語づくりを手伝うことになった。

彼らは互いに支えあい、激論を交わしあいながら、未来について構想した。

そんな彼らが夢ノ咲学院の支配者『fine』として、革命児『Trickstar』に倒されるのは、陰鬱な冬が終わった後のことである。

薄汚れ、疲れ切った鳥が運んだ種子が、花を芽吹かせる季節だ。

あんさんぶるスターズ!!

選 輯 セ レ ク シ ョ ン

エレメント

ELEMENT